

幸せを「見る」ということ 研究所長 小西聖子



昨年4月より一年間、所長を務めさせていただきました。いろいろと至らぬ点もあったかと存じます。

来年度からは、前野ウェルビーイング学部長・研究科長に所長の役目を引き継ぐ予定です。第一人者の先生に所長を担っていただくことで、研究所の機能もさらに充実していくものと期待しております。

ただ、この任期のあいだ、「幸せ」とは何かについて折に触れて考える機会を得たことは、私にとって極めて有意義でした。仏教から見る幸せとはどのようなものか、心理学から見た幸せとはどのようなものか、あるいは法学や社会学の観点から捉えたときにどのように位置づけられるのか——そうした多様な視点からの気づきを、この間に得られたことは貴重な経験でした。

本学の掲げる「世界の幸せをカタチにする。」というブランドステートメントは、前向きで明るいものです。しかしながら、研究所が扱う「幸せ」は、必ずしも感情の側面のみにとどまるものではないことは、皆様もご承知のとおりかと思えます。

私は医師ですから、基本的には苦痛を軽減することが仕事でした。病院には健康な人はあまり来ません。特に私の専門はトラ

世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World



Musashino University Creating Happiness Incubation

武蔵野大学しあわせ研究所

電話：03-5530-7730

東京都江東区有明3-3-3

メール：mhi@musashino-u.ac.jp

ウマですから、生活に困難を抱え、生きる意味にも疑問を抱えた方が数多くいらっしゃいます。人が怖くて仕方がなければ、日常生活を円滑に営むことはできません。誰も信頼することができなければ、人に助けってもらうこともできません。自らの価値を認めることができなければ、生きている意味が分かりません。

このような苦悩を軽減するために、実践では、まず現実を「見る」ことが必要です。またこの「見る」は、客観的に観察すること、患者さんの主観的な苦痛に共感することの両方から成り立っています。医学の診断と治療はいつもこのような二面性を持っています。現実を適切に捉えなければ、何が問題であるのか自体が見えなくなってしまうからです。

実は、幸せを考えるにも、よく「見ること」が重要であるのは、どのような視点でも同じであると、所長としての経験を通して、気づきました。どの視点に立つにしても、世界をどのように認知し、その中にある問題をどのように見出すかという態度が重要だともいえます。だからこそ、ウェルビーイング学が成り立つのだといえるでしょう。

現実の認識と実践が積み重ねられ、来年度からさらにウェルビーイング学の豊かな活動が広がっていくことを期待しています。